常啼菩薩求法譚の完成時期について

――比較対照表（前半）による検証――

佐　伯　慈　海

〔抄　録〕

小論の目的は常啼菩薩求法譚の完成時期を確認することにある。そのためには、小品系、大品系、十万頌般若の常啼菩薩求法譚に『六度集経』「常悲菩薩本生」を加えて俯瞰する必要がある。そこで上記諸経の比較対照表を作成し検証したところ、常啼菩薩求法譚の完成時期は『放光般若経』の時点であり、『道行般若経』とその義訳たる『大明度経』の常啼菩薩求法譚は、大乗的本生経類から発展して般若経の求法譚としての構造が整うまでの中間形態という位置付けが相応しいとの結論に至った

キーワード　般若経　常啼菩薩　求法譚

常啼菩薩求法譚は仏がスブーティに般若波羅蜜を求めんと欲するならば常啼菩薩の如くすべし（対照表２）と勧めて物語が始まる。(『大般若波羅多経初会』のみ、その前に導入句が存在し（対照表１)、『六度集経』「常悲菩薩本生」は本生談という性格上、仏のスブーティへの説示はない)。求法譚の終りにもスブーティへの説示（付嘱）があって常啼菩薩求法譚が終了するという構造になっている。さらにアーナンダへの付嘱が続き般若経自体が終了する。『道行般若経』と『大明度経』が他の諸本と趣を異にしているものの、常啼菩薩求法譚の骨子骨格や展開過程が小品系統から大品系統へと展開する諸訳諸本を通してほとんど変わらないとされている(1)が、小品系、大品系、十万頌般若の常啼菩薩求法譚に『六度集経』「常悲菩薩本生」(2)を加えて俯瞰しつつ諸経を比較すると、これとは異なる視界も広がってくることがわかる。以下、紙数の制約によりに比較対照表の前半部を示す。設定した項目は自らの研究内容に沿うものなので、項目立てに精粗はあるが、求法譚の概要と般若諸経における内容の相違を把握するには役立つと考えた。なお、対照表の般若諸経は左から成立順に並べた(3)。対照表における略号は次の通り。以下の本文で経典を示す場合にもこれらの略号を用いた。表中、項目内容と合致したものは○で表し、一部合致したものや内容が近似するものは△で表した。

S：常悲菩薩、薩陀波倫菩薩、普慈闍士、薩陀波崙菩薩、常啼菩薩、rtag tu ngu、rtag bar rap tu ngu ba、Sadāprarudita

D：法来菩薩、曇無竭菩薩、法来闍士、法上菩薩、chos ’phags、chos kyis ’phags pa、Dharmodgata

六度：『六度集経』大正新修大蔵経第三巻

道行：『道行般若経』大正新修大蔵経第八巻

大明：『大明度経』大正新修大蔵経第八巻

放光：『放光般若経』大正新修大蔵経第八巻

蔵18：’phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri brgyad stong pa zhes bya ba theg pa chen po’i mdo, sde dge No. 10（蔵訳一万八千頌般若）

大品：『大品般若波羅蜜経』大正新修大蔵経第八巻

蔵25：shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa, sde dge No. 9（蔵訳二万五千頌般若）

初会：『大般若波羅蜜多経初会』大正新修大蔵経第五巻六巻

小品：『小品般若波羅蜜経』大正新修大蔵経第八巻

仏母：『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』大正新修大蔵経第八巻

蔵08：’phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa, sde dge No. 12（蔵訳八千頌般若）

ASPP：Aṣṭāsāhasrikā prajñāpāramitā (Abhisamayālaṃkārālokā prajñāpāramitāvyākhyā : the work of Haribhadra, together with the text commented on / by U. Wogihara, Tokyo : ToyoBunko, 1973)（梵本八千頌般若）

		六度	道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP
1	一切法は有に非ず無に非ず、自性無く他性無く、先に既に有に非ず後亦た無に非ず、自性常に空にして怖畏する所無し。是の如く初業の菩薩を教授教誡すべし								○ 1059a				
2	Ｓは今雷音威王如来の許で修行しているが般若波羅蜜を求めんと欲すればＳの如くすべしと仏がスブーティに告げる		△(4) 470c	△(5) 503c	○(6) 141b	○(7) 181b	○(8) 416a	○(9) 353b	○(10) 1059a	○(11) 590a	△(12) 668a	○(13) 261a	○(14) 927
3	スブーティが仏にＳがどのようにして般若波羅蜜を求めたのか問う		○ 470c	○ 503c	○ 141b	○ 181b	○ 416a	○ 353b	○ 1059a	○ 580a	○ 668a	○ 261a	○ 927
4	Ｓの前世の功徳によると仏がスブーティに答える		○ 470c	○ 503c									
5	常に仏に会って経の妙旨を聴かんと欲するも、時の世穢濁なるをＳが嘆く	○ 43a											
6	夢中の天人の言により大法を求むも得ず、見仏聞法も叶わぬことを嘆く		○ 470c 471a	○ 503c 504a									
7	夢中に前世仏の名を聞き歓喜し、家を棄て深山に入る	○ 43a	○ 471a	○ 504a									

		六度	道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP
8	深山に入るも見仏聞法叶わず慟哭す	○ 43a	○ 471a	○ 504a									
9	空中の声が般若波羅蜜を得るよう告げる	○(15) 43b	○ 471a	○ 504a									
10	Ｓがどうやって般若波羅蜜を得ればよいのかを空中の声に問う	○(16) 43b	○ 471a	○ 504a									
11	Ｓが般若波羅蜜を求めて空閑林中にいた時に空中の声を聞いたことを世尊がスブーティに告げる				○ 141b	○ 181b	○ 416a	○ 353b	○ 1059a	○ 580a	○ 668a	○ 261a	○ 927
12	空中の声が東へ行くよう告げる	○(17) 43b	○ 471a	○ 504a	(18)	○ 181b	○ 416ab	○ 353b	○ 1059a	○ 580a	○ 668a	○ 261a	○ 927
13	空中の声がＳに求法の心構えを説く	○(19) 43b	○ 471ab	○ 504a	○ 141bc	○ 181b 182a	○ 416b	○ 353b 354a	○ 1059bc	○ 580ab	○ 668ab	○ 261ab	○ 927 928
14	空中の声に対し教えに隨うとＳが答える	○(20) 43b	○ 471b	○ 504a	○ 141c	○ 182a	○ 416b	○ 354a	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○ 261b	○ 928
15	衆生の為に大明とならんと欲す				○ 141c	○ 182a	○ 416b	○ 354a	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○ 261b	○ 929
16	仏法を広宣せんと欲す				○ 141c								
17	一切諸仏の法を集めんと欲す					○(21) 182a	○ 416b	○(22) 354a	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○(23) 261b	○(24) 929
18	阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す				○ 141c		○ 416b		○ 1059c				
19	空中の声がさらにＳを励ます	○(25) 43b	○ 471b	○ 504a	○ 141c	○ 182a	○ 416b	○ 354ab	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○ 261b	○ 929
20	善知識に親近することを説く				○ 141c	○ 182ab	○ 416b	○ 354b	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○ 262a	○ 930
21	善知識が空無相無願（作）の法、無生不滅の法を説き、人に薩云若を得させると告げる				○ 141c								
22	善知識が空無相無作無生無滅の法及び一切種智を説くと告げる						○ 416b						
23	善知識が空無相無願無生無滅無染無浄本寂の法を説き、一切智智を示現教導讃勵慶喜せしむと告げる								○ 1059c				
24	善知識が空無相無作無生無滅法を能く説くと告げる							○ 354b		○ 580b			
25	善知識が一切法の空無相無願無生無滅無性を説くと告げる										○ 668b		○ 930
26	善知識が一切法の空無相無願本無無生無性無滅を説くと告げる					○ 182ab						○ 262a	
27	空中の声が久しからずして経巻もしくは菩薩より般若波羅蜜を聞くであろうと告げる				○ 141c	○ 182b	○ 416b	○ 354b	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○ 262a	○ 930

		六度	道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP
28	空中の声が法師に対する恩義を忘れないようにと説く				○ 141c	○ 182b	○ 416b	○ 354b	○ 1059c	○ 580b	○ 668b	○ 262a	○ 930
29	法師に対し教師（大師）の想を生ずべし				○(26) 141c	○(27) 182b	○(28) 416b	○(29) 354b	○ 1059c	○ 590b	○ 668c	○(30) 262a	○(31) 930
30	空中の声が魔事を説く				○ 141c	○ 182b	○ 416bc	○ 354b	○ 1060a	○ 580b	○ 668c	○ 262a	○ 930
31	法師が五欲を受けるのは方便をもって衆生を度す為であることを告げる				○(32) 141c	○ 183a	○ 416bc	○ 354b 355a	○ 1060a	○ 580b	○ 668c	○ 262b	○ 930 931
32	空中の声が、諸法の実相（空）を観じ、法師に随逐すれば久しからずして般若波羅蜜を聞くであろうと告げる				○ 141c	○ 183a	○ 416c	○ 355a	○ 1060a	○ 580bc	○ 668c	○ 262b	○ 931
33	空中の声が、法師に無視されるようなことがあっても一心に法を求め法師を恭敬すべきであると告げる				○ 141c 142a	○ 183a	○ 416c	○ 355a	○ 1060ab	○ 580c	△(33) 668c	○ 262b	○(34) 931
34	Ｓが東へと向かう	○ 43b	○ 471b	○ 504a	○ 142a	○ 183a	○ 416c	○ 355a	○ 1060b	○ 580c	○ 668c	○ 262b	○ 931
35	空中の声に対して、どれほど東へ行けばよいのか尋ねなかったことを後悔し慟哭す	△(35) 43b	△(36) 471b	△(37) 504a	○ 142a	○ 183a	○ 416c 417a	○ 355a	○ 1060b	○ 580c	○ 668c 669a	○ 262b 263a	○ 931
36	空中に仏が現れ、Ｓを称賛してから行先を告げ、その街の素晴らしい様子を教える	△(38) 43bc	△(39) 471bc 472a	△(40) 504ab	○(41) 142ab	○(42) 183b 184ab 185a	○(43) 417ab	○(43) 355b 356ab 357a	○(45) 1060bc 1061a	○(46) 580c 581a	○(47) 669abc	○(48) 263ab 264ab	○(49) 932 933 934
37	仏はＤが五欲を具足し女人と娯楽する様子を示す		△(50) 472a	△(51) 504b	△(52) 142b	○ 185ab	○ 417b	○ 357ab	○ 1061a	○ 581a	○ 669c	○ 264b	○ 934 935
38	仏がＤの説法の様子を示す	○ 43c	○ 472a	○ 504b	○ 142bc	○ 185b	○ 417bc	○ 357b	○ 1061ab	○ 581ab	○ 669c	○ 265ab	○ 935
39	仏がＳにＤの許へ行くよう告げる	○ 43c	○ 472a	○ 504b	○ 142c	○ 185b 186a	○ 417c	○ 358a	○ 1061b	○ 581b	○ 669c	○ 265b	○ 936
40	仏はＤが般若波羅蜜を説いてくれるとＳに告げる	○ 43c	○ 472a	○ 504bc	○ 142c	○ 186a	○ 417c	○ 358a	○ 1061b	○ 581b	○ 669c	○ 265b	○ 936
41	Ｓは歓喜しいつＤに会い般若波羅蜜を聞くことが出来るのだろうと思念する				○ 142c	○ 186a	○ 417c	○ 358a	○ 1061b	○ 581b	○ 669c 670a	○ 265b	○ 936
42	Ｓが三昧を得る	○(53) 43c	○(54) 472a	○(55) 504c	○(56) 142c	○(57) 186ab 187a	○(58) 417c 418a	○(59) 358ab 359a	○(60) 1061c 1062a	○(61) 581bc	○(62) 670ab	○(63) 265b 266ab 267a	○(64) 940 941 942
43	三昧に諸仏が現れＳを安慰す	○ 43c	○ 472a	○ 504c	○ 142c	○ 187b	○ 418a	○ 359b	○ 1062a	○ 581c	○ 670b	○ 267a	○ 942
44	Ｓが諸仏に誰を善友となすべきか問う				○ 143a	○ 188a	○ 418b	○ 360a	○ 1062a	○ 581c	○ 670b	○ 267b	○ 943
45	諸仏はＤが善友であることを告げ、姿を消す		△(65) 472a	△(66) 504c	○ 143a	○ 188a	○ 418b	○ 360a	○ 1062b	○ 581c 582a	○ 670bc	○ 267b	○ 943

		六度	道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP
46	Ｓは三昧から覚め、かの諸仏は何処より来たり何処へ去ったのかと念ず	○ 43c	○ 472a	○ 504c	○ 143a	○ 188b	○ 418b	○ 360b	○ 1062b	○ 582a	○ 670c	○ 268a	○ 943
		以上常悲菩薩本生											
47	Ｓは諸仏の去来についてＤに尋ねようと心に決める				○ 143a	○ 188b	○ 418b	○ 360b	○ 1062b	○ 582a	○ 670c	○ 268a	○ 944
48	ＳはＤの供養ために身を売って財を得ようとするが、悪魔の妨害により売ること叶わず		○ 472b	○ 504c	○ 143ab	○ 189ab 190a	○ 418bc	○ 361a	○ 1062bc 1063a	○ 582ab	○ 670c 671a	○ 268ab	○ 944 945
49	シャクラがＳを試さんと婆羅門に姿を変えＳに血、髄、心を求む		○ 472b	○ 504c 505a	○ 143b	○ 190a	○ 418c 419a	○ 361b 362a	○ 1063a	○ 582b	○ 671ab	○ 268b 269ab	○ 945 946 947
50	Ｓは歓喜してこれに応じる		○ 472b	○ 505a	○ 143b	○ 190a	○ 419a	○ 362ab	○ 1063a	○ 582b	○ 671b	○ 269b	○ 947
51	Ｓが身体を害する様子を見た長者女がその理由を尋ねる		○ 472bc	○ 505a	○ 143bc	○ 190ab	○ 419a	○ 362b	○ 1063a	○ 582b	○ 671b	○ 270a	○ 947
52	自らに般若波羅蜜を説くＤへの供養の具を得るためであるとＳが長者女に答える		○ 472c	○ 505a	○ 143c	○ 190b	○ 419a	○ 362b	○ 1063ab	○ 582bc	○ 671b	○ 270a	○ 947
53	Ｄの説法により阿耨多羅三藐三菩提を得て衆生の帰依所（依止）となるとＳが告げる				○(67) 143c	○ 190b	○ 419a	○ 362b 363a	○(68) 1063b		○(69) 671b	○ 270a	○ 948
54	仏の相好を得るとＳが告げる		○ 472c	○ 505a	○ 143c	○ 190b	○ 419a	○ 363a	○ 1063b	○ 582c	○ 671b	○ 270ab	○ 948
55	十八不共法等、仏の諸徳性を得るとSが告げる		○ 472c	○ 505a	○ 143c	○ 190b	○ 419a	○ 363a	○ 1063b	○ 582bc	○(70) 671b	○ 270b	○ 948
56	無礙之慧を得るとＳが告げる				○ 143c	○(71) 191a	○(72) 419a	○ 363a	○(73) 1063b	○(74) 582c	○(75) 671b	○(76) 270b	○(77) 948
57	一切衆生へ分与するとＳが告げる		△(78) 472c	△(79) 505a	△(80) 143c	○ 191a	○ 419a	○ 363a	○ 1063b	○ 582c	○ 671b	○ 270b	○ 948
58	長者女はＳの志を聞き歓喜し、Ｓが身を害するのを止める		○ 472c	○ 505a	○ 143c	○ 191a	○ 419ab	○ 363b	○ 1063bc	○ 582c	○ 671c	○ 270b	○ 948 949
59	長者女が自らもＤを供養し善根を植えることを望む		○(81) 472c	○ 505a	○ 143c	○ 191a	○ 419b	○ 363b	○ 1063c	○ 582c	○ 671c	○ 270b	○ 949
60	シャクラは元の姿に戻り、Ｓを試したことを告げ、Ｓの望みを叶えると告げる		○ 472c	○ 505a	○ 143c	○ 191ab	○ 419b	○ 363b 364a	○ 1063c	○ 582c	○ 671c	○ 270b 271a	○ 949
61	Ｓは阿耨多羅三藐三菩提を与えよと告げる				○ 143c	○(82) 191b	○ 419b	○(83) 364a	○(84) 1063c	○ 582c	○ 671c	○(85) 271a	○(86) 949
62	シャクラは力が及ばないので別の望みにするよう告げる				○ 143c 144a		○ 419b	○ 364a	○ 1063c	○ 582c	○ 671c	○ 271a	○ 949
63	Ｓは般若波羅蜜を与えよと告げる								○ 1063c				
64	シャクラは力が及ばないので傷ついたＳの身体をもとに戻すと告げる								○ 1063c				

			道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP
65	Ｓ自らの願力、実語力と仏の威神力により身がもとに戻りますようにとＳが自念する					○ 191b		○ 364a			○ 671c	○ 271a	○ 949
66	Ｓ自らの願力と仏の威神力により我が身はもとに戻るため、シャクラの助けは必要ないのだが、シャクラの望みを叶えさせてやる								○ 1063c 1064a				
67	Ｓがシャクラに我が身をもとに戻すよう頼む		○ 472c	○ 505a	○ 144a		○ 419b			○ 582c			
68	Ｓの身体が元に戻りシャクラは姿を消す		○ 472c	○ 505a	○ 144a	○ 191b 192a	○ 419b	○ 364a	○ 1064a	○ 582c	○ 671c	○ 271ab	○ 950
69	長者女が父母に頼んでＤへの供養の具をＳに提供させると告げる		○ 472c	○ 505a	○ 144a	○ 192a	○ 419b	○ 364ab	○ 1064a	○ 582c	○ 671c 672a	○ 271b	○ 950
70	Ｓと長者女が父母のもとに到る		○ 472c	○ 505a	○ 144a	○ 192a	○ 419b	○ 364b	○ 1064a	○ 582c	○ 672a	○ 271b	○ 950
71	長者女が父母にＤへの供養の具の提供と自らの同行を許してくれるよう求める				○ 144a	○ 192a	○ 419bc	○ 364b	○ 1064a	○ 582c 583a	○ 672a	○ 271b	○ 950
72	父母の問いに対して長者女がこれまでの経緯を父母に話し、重ねて供養の具の提供と自らの同行を許してくれるよう求める		△(87) 472c	△(88) 505a	○ 144a	△(89) 192ab 193b	○ 419c 420ab	○ 364b 365ab 366a	○ 1064abc 1065ab	○ 583a	○ 672ab	△(90) 271b 272ab 273a	○ 950 951 952 953
73	父母が供養の具の提供と娘の同行を快諾する		○ 472c	○ 505a	○ 144a	○ 193b	○ 420b	○ 366a	○ 1065b	○ 583ab	○ 672b	○ 273a	○ 953
74	父母自身は年老いて同行できないと告げる		○ 472c	○ 505a	○ 144ab		△(91) 420b						
75	父母自身も同行を決める					○ 193b		○ 366a	○ 1065b	○ 583b	○ 672b	○ 273a	○ 953
76	ガンダヴァティーに到り、その様子（荘厳）が説かれる		○ 473a	○ 505a	○ 144b	○ 194a	○ 420b	○ 366b	○ 1065bc	○ 583b	○ 672bc	○ 273b	○ 954
77	Ｄの説法の様子を遥見しＳが禅楽を得るが如くなる				○(92) 144b	○(93) 194a	○(94) 420b	○(95) 366b	○(96) 1065c	○(97) 583b	○(98) 672c	○(99) 273b	○(100) 954
78	Ｓ達は車を降りＤのもとへ歩いて近づく		○ 473a	○ 505a	○ 144b	○ 194ab	○ 420b	○ 367a	○ 1065c	○ 583b	○ 672c	○ 273b 274a	○ 954
79	荘厳な高台（楼閣）を見る		○ 473a	(101)	○(102) 144b	○(103) 194b	○(104) 420bc	○(105) 367a	○(106) 1065c 1066a	○(107) 583b	(108)	○(109) 274a	○(110) 955
80	高台（楼閣）の中に七宝の床があり、その中に般若波羅蜜を収めた四宝の函がある。それを諸天が供養している				○(111) 144b	○(112) 194b	○(113) 420c	○ 367ab	○ 1066a	○ 583b	△(114) 672c 673a	○(115) 274a	○ 955
81	Ｓがシャクラに向かい高台（楼閣）を供養する理由を問う		△(116) 473a	△(117) 505a	○ 144b	○ 194b 195a	○ 420c	○ 367b	○ 1066a	○ 583b	○ 673a	○ 274ab	○ 955

			道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP
82	シャクラがＳに般若波羅蜜を供養していることを告げる		△(118) 473a	△(119) 505b	○ 144b	○ 195a	○ 420c	○ 367b	○ 1066a	○ 583bc	○ 673a	○ 274b	○ 955 956
83	シャクラは菩薩が般若波羅蜜を学び一切智等を得ると告げる				○(120) 144b	○(121) 195a	○(122) 420c	○(123) 367b	○(124) 1066a	○(125) 583c	○(126) 673a	○(127) 274b	○(128) 956
84	Ｓがシャクラに般若波羅蜜は今どこにあるのか問う				○ 144b	○ 195a	○ 420c	○ 367b	○ 1066a	○ 583c		○ 274b	○ 956
85	高台の中の七宝の函の中にあるとシャクラが答える		△(129) 473a	△(130) 505b	○ 144b	○ 195a	○ 420c	○ 367b	○ 1066a	○ 583c	○ 673a	○ 274b	○ 956
86	函は七宝の印により封印されていて見せることが出来ないと告げる				○ 144bc	○ 195a	○ 420c	○ 367b 368a	○ 1066a	○ 583c	○ 673a	○ 274b	○ 956
87	Ｓと長者女たちは般若波羅蜜とＤを持参した供具により供養する		○ 473b	○ 505b	○ 144c	○ 195ab	○ 420c 421a	○ 368a	○ 1066b	○ 583c	○ 673ab	○ 274b 275a	○ 956
88	Ｄが神通を示し、長者女たちがＤのごとく般若波羅蜜と方便を兼備し完成しますようにと誓願を立てる				○ 144c	○ 195b 196a	○(131) 421a	△(132) 368b 369a	○(133) 1066bc	○(134) 583c	○(135) 673b	○(136) 275ab	○(137) 957 958
89	Ｓ達の到来をＤが歓迎して受け入れる		○ 473b	○ 505b									
90	ＳがＤにここに到るまでの経緯を話す		○ 473bc	○ 505b	○ 144c 145a	○ 196b 197a	○ 421ab	○ 369ab 370a	○ 1066c 1067ab	○ 583c 584a	○ 673bc	○ 275b 276ab	○ 958 959
91	Ｓが先に得た三昧の中で出会った十方の諸仏は何処より来り、去って何処に至るかとＤに尋ねる		○ 473c	○ 505b	○ 145a	○ 197a	○ 421b	○ 370a	○ 1067b	○ 584a	○ 673c	○ 276b	○ 959
			続く	続く	以上薩陀波倫品	以上常啼品	以上常啼品	以上常啼品	以上常啼菩薩品	以上薩陀波崙品	以上常啼菩薩品	以上常啼品	以上常啼品
			道行	大明	放光	蔵18	大品	蔵25	初会	小品	仏母	蔵08	ASPP

冒頭（対照表５－８）、『六度』「常悲菩薩本生」（以下「常悲」）には時の世穢濁なるを嘆き、『道行』『大明』には見仏聞法の叶わぬことを嘆いている。梶山雄一先生は、

> 『八千頌』が編集されているころのインドではストゥーパの信仰と儀礼は頂点に達していた。ストゥーパに象徴される過去の諸仏とともに、アクショービヤ・ラトナケートゥ・アミターバ（Amitābha 無量光）などの現在諸仏、マイトレーヤなどの未来仏の信仰も盛んであった。無上にして完全なさとりをさとって仏陀になろうとして求道していた大乗の菩薩たちはしばしば夢や幻や瞑想の中で現在諸仏に会い、般若波羅蜜の追求を勧められていた。『八千頌』にあらわれるサダープラルディタ（Sadāprarudita 常啼）菩薩の求道物語はその範型である。仏教徒がそれまでははばかっていた仏像の製作も間もなく始められようとしていた。要するに、この時代は、仏教徒がなんとかしてもう一度仏陀に会いたいと強く願望していた時代であった。(138)

としており、この時代は常啼菩薩求法譚の成立時期と重なる(139)。この世での見仏聞法が叶わないことを嘆く様子は『放光』以降には存在しない表現であり、常啼菩薩求法譚が成立する時

代背景が『道行』『大明』の常啼菩薩求法譚に写し取られたものと考えられる。一方、深山、山、寂處、空閑林等表現は様々であるが、araṇya に於て空中の声を聞き（対照表 9 -13）、その後、東へと求法の旅に出てガンダヴァティーのような街で法上菩薩という善知識によって般若波羅蜜が説かれ、市井にあっても般若波羅蜜を得て見仏聞法が叶うという展開は、すべての般若経の常啼菩薩求法譚に共通する。これを阿蘭若住比丘と村住比丘との対立という構図[140]に基づき常啼菩薩求法譚も村住比丘により作成されたと見ることもできる。また『道行』「遠離品」を見ると、

佛語須菩提。我不作是説遠離教菩薩摩訶薩。於獨處止。於樹間止。於閑處止。[141]

佛須菩提に語く。我れ是の説を作さず。遠離を菩薩摩訶薩に教えて獨處に於て止め、樹間に於て止め、閑處に於て止めしむと。

とし araṇya に在ることが遠離ではないことを説いている[142]。さらに『放光』以降では遠離がより明確になる。具体的に『小品』『放光』の例を上げると、

須菩提。若菩薩遠離聲聞辟支佛心。如是遠離。若近聚落亦名遠離。[143]

須菩提、若し菩薩が聲聞辟支佛心を遠離し、是の如く遠離せば、若し聚落に近づくも亦た遠離と名づく。

佛告須菩提。菩薩遠離。寂於聲聞辟支佛念。寂於山間樹下獨處念。須菩提。菩薩如是是爲大遠離之法。菩薩如是當晝夜行。是爲菩薩寂然遠離。若在人間隨我寂教者。雖在城傍爲與山澤等無有異。[144]

佛須菩提に告ぐ。菩薩が遠離して聲聞辟支佛の念に於て寂し、山間樹下獨處の念に於て寂す。須菩提、菩薩は是の如し。是を大遠離之法と爲す。菩薩は是の如く當に晝夜に行ずべし。是を菩薩寂然遠離と爲す。若し人間に在りて我が寂教に隨えば城傍に在りと雖も山澤等と異有ること無しと爲す。

菩薩が「どこにいるか」を問題にせず、声聞独覚の境地を遠離して聚落に近づくことも認めている。従って常啼菩薩求法譚冒頭のこの場面は菩薩が声聞独覚のように社会を離れるのではなく、声聞独覚の境地を遠離して社会の中にあるべきことを強調しているとも考えられる。

次に、空中の声（『六度』「常悲」は天人）が常啼菩薩に東への求法の心構えを説いた後、常啼菩薩がこれに応じる場面（対照表の14-18）では、『道行』『大明』はそれに従うと述べるのみで、『六度』「常悲」と共通する。しかし、『放光』以降は「衆生の為に大明とならんと欲す」「一切諸仏の法を集めんと欲す」等、常啼菩薩のより詳細な意志が示されている。引き続き、空中の声（『六度』「常悲」は天人）が常啼菩薩を励ます場面（対照表19-26）でも『道行』『大明』は空中の声が常啼菩薩を励ますのみで『六度』「常悲」と共通する。しかし、『放光』以降に於ては「善知識への親近」と「空無相無願（作）の三三昧（三解脱門）[145]」が説かれている。法師に対する恩義の強調や「法師に対して教師（大師）の想を生ずべし」といった内容（対照表28-29）は『放光』以降にのみ見られ、『六度』「常悲」『道行』『大明』には見られない。こ

の三三昧は『道行』の常啼菩薩求法譚以前の章品では次のように述べられる。

佛言。是菩薩悉爲護薩和薩。守空三昧向泥洹門。心念分別。何等爲分別。守空三昧無相三昧無願三昧。是爲分別漚恕拘舍羅。使是菩薩不中道取證。何以故。漚恕拘舍羅護之故。(146)

佛言く。是の菩薩は悉く薩和薩（一切衆生）を護らんと爲す。空三昧を守し(147)泥洹門に向い心に分別を念ず(148)。何等分別と爲す。空三昧、無相三昧、無願三昧を守す。是の分別を爲すは漚恕拘舍羅なり。是の菩薩をして中道に證を取らしめず。何を以ての故か。漚恕拘舍羅が之を護るが故なり。

ところが、『道行』の常啼菩薩求法譚に三三昧は反映されていない。別行に流布していた常啼菩薩求法譚が『道行』に付加されたものの、常啼菩薩求法譚以前の章品との整合性が取られていない状況が浮かび上がる。『大明』も同様である(149)。またここには空三昧、無相三昧、無願三昧の分別を漚恕拘舍羅（善巧方便）とし、この善巧方便こそが菩薩を護り、中道すなわち菩薩の善根が完全な智慧において充分に成長する中途において證を取る（阿羅漢、辟支佛の地に落ちる(150)）ことはないとしており、善巧方便の重要性が強調されている。このことは次の五欲具足とも関わる。

空中の声が魔事を説く中（対照表30-33）で、法師の五欲具足を衆生を度すための方便と位置付けているのは『放光』以降であり、『六度』「常悲」『道行』『大明』には魔事そのものが説かれない。五欲具足について再度触れられる場面（対照表37）では、『道行』は「六百八十萬夫人采女有りて共に相娛樂す」『大明』は「六百八十萬玉女妻有り」とあり、五欲具足を推測させるものの「五欲」という表現はない。『六度』「常悲」には一切見られない（ただし、対照表31で「五樂（欲）」の表現のあった『放光』であるが、ここ（対照表37）では「六萬八千夫人婇女有りて圍繞し娛樂す」となっており「五樂（欲）」の表現を欠く）。『六度』「常悲」の「魔事も五欲具足を想像させる内容も説かれない状態」→『道行』『大明』の「魔事は説かれないが五欲具足を想像させる内容が説かれる状態」→『放光』以降の「五欲具足とその方便化が説かれる状態」という展開が見て取れる。

常啼菩薩が東へと出発してから三昧を得て諸仏から安慰されるまで（対照表34-43）は、37項を除き『道行』『大明』は『六度』「常悲」と共通し、35～37項、41項を除き『放光』以降と共通する。ただし、三昧（対照表42）については『六度』「常悲」が「現在定」、『道行』が「見十方諸佛三昧」、『大明』が「見十方佛定」と一種類であり諸仏を見るという三昧の内容も合致するのに対し、『放光』以降は三昧が多様化し、その数が11から62へと増加する。このように、『道行』『大明』の常啼菩薩求法譚は『六度』「常悲」と共通する項目が多い。なお、常悲菩薩が三昧から覚めて諸仏が何処より来られ何処へ去られたのかと念じるところ（対照表46）で『六度』「常悲」は終了する。

常啼菩薩が自らの身を害する理由を長者女に答える場面（対照表52-57）では、『放光』以降に『道行』『大明』にはない「法上菩薩の説法により阿耨多羅三藐三菩提を得て衆生の帰依所

となる」(『小品』にはない)、「無礙の慧を得る」といった内容が加わっている。

シャクラが常啼菩薩を試した後、常啼菩薩の望みを叶える場面（対照表60-68)、『道行』『大明』では常啼菩薩が我身の平復を願いシャクラがこれに応じるという単純な展開であるのに対して、『放光』以降ではまず阿耨多羅三藐三菩提を与えよと願う（『初会』はさらに般若波羅蜜多を与えよと願う)。その上で『道行』『大明』『放光』『大品』『小品』はシャクラに身を平復してもらう。『蔵18』『蔵25』『仏母』『蔵08』ASPP はシャクラの力を借りず、常啼菩薩自身の願力と仏の威神力により我が身が平復する。『初会』も同様にシャクラの助けは必要ないのだが、常啼菩薩は敢えてシャクラの望みを叶えさせ、シャクラに我が身を平復させる。このように『放光』以降は物語の内容が深化しているのがわかる。

ガンダヴァティーで法上菩薩の説法の様子を見て常啼菩薩が禅楽を得る場面（対照表77）は『放光』以降にのみあり、『道行』『大明』にはない。

高台に納められた般若波羅蜜に関する記述（対照表80-86）において、『放光』以降は諸天が般若波羅蜜の納められた函を供養し、シャクラが般若波羅蜜の存在を告げるのに対して『道行』『大明』には諸天の供養はなく、般若波羅蜜の存在もガンダヴァティーの住人が告げる。また、『放光』以降は般若波羅蜜を収めた函が七宝の印で封印されているが（対照表86)、『道行』『大明』では封印されていない。これらの様子は般若経典そのものが礼拝の対象としての位置づけを高めていく過程を示していると考えられる。またシャクラが般若波羅蜜を学ぶことで菩薩が一切智等を得ると告げる場面（対照表83）は『放光』以降にみられ『道行』『大明』にはない。

常啼菩薩と長者女たちが法上菩薩を供養後、長者女たちが般若波羅蜜と方便を完成しますようにとの誓願を立てる場面（対照表88）は『放光』以降にあるが、『道行』『大明』にはない。

〈まとめ〉

このように、『道行』『大明』の常啼菩薩求法譚を『放光』以降のそれと比較すると、内容の相違、増加、深化が確認できる。これらは般若経自体の小品系から大品系への増広に伴うものと考えることもできる。しかし、梶芳光運先生は「常啼菩薩品は『六度集経』から脱化して存在し、それを放光系統が付加し、また道行系統も添加し、従って別々に虚説ならざるを証するものとして付加されたのかもしれない[151]」として、『放光』の常啼菩薩求法譚が『道行』からの増広ではない可能性を示唆している。上記の検証によれば、求法譚の冒頭で常啼（悲）菩薩が見仏聞法が叶わないことを嘆く様子は、『六度』「常悲」『道行』『大明』にのみ存在し、『放光』以降には見られない。空、無相、無願（作）の三三昧は、『道行』『大明』の常啼菩薩求法譚以前の章品に存在していながら、常啼菩薩求法譚に反映されず『放光』以降に定着し常啼菩薩求法譚以前の章品との整合性が保たれている。また、法上菩薩の五欲具足と、五欲具足を衆生を度する方便と位置付ける考え方も『道行』『大明』には見られず、『放光』以降に定着して

いる。この五欲具足とその方便化によって法上菩薩の在家性を伴う善知識像が完成する以上、すでに固まった骨子に肉付けがされたという次元でこれを捉えるわけにはいかない。譬喩や三昧の数にばらつきが見られるとしても、『放光』以降の常啼菩薩求法譚に構造上大きな差異がないことから、常啼菩薩求法譚の構造は『放光』において完成したと考えられる。また、スブーティへの説示や法上菩薩の五欲具足といった本生談にそぐわない項目を除けば、『道行』『大明』の前半の構造は『六度』「常悲」に近いことも対照表から明らかである。これらの状況から、『道行』『大明』の常啼菩薩求法譚は大乗的本生経類(152)から般若経の求法譚として構造が整うまでの中間形態という位置付けが相応しいのではないか。引き続き検証する。

〔注〕

（１）『道行般若経』と、これを継承して改訳した呉支謙訳『大明度経』の古訳二本の経文が、ほかの諸本と対比して趣きを少しく異にしている。とくに、『道行般若経』薩陀波倫菩薩品第二十八及び『大明度経』普慈闍士品第二十八の冒頭にそれぞれ記される「常啼菩薩の求法因縁譚」の一段や、嘱累品第三十及び嘱累阿難品第三十の流通分の教説などは、古訳両本に特異・特有のもので、〈常啼菩薩品〉の成り立ちに示唆を与える。しかし、〈常啼菩薩品〉全体の骨子骨格や展開過程は、小品系統から大品系統へと展開する諸訳諸本を通してほとんど変わらず、古訳以来の原型は崩れていないと見るべきであろう。勝崎裕彦著「小品系般若経〈常啼菩薩品〉の解釈」（大正大学研究紀要第86輯）、2006、p. 5

（２）常啼菩薩求法譚の原型に近い形を残すとされている。藤田正浩著「仏伝文学と大乗仏教―『六度集経』の「常悲菩薩物語」と『般若経』の「常啼菩薩品」―」『印度学仏教学研究』第39巻第１号、2000、pp. 26-31

（３）『八千頌般若』についてだが、『蔵08』は梶芳光運先生が『仏母』に対応するとし（梶芳光運著『大乗仏教の成立史的研究』、春秋社、1980、p. 88）、梶山雄一先生は ASPP が『仏母』（982年施護訳）と形式、内容がよく一致し、A.D. 645-800に現形を得たとしている。また『蔵08』は漢訳よりもさらに原典に忠実な翻訳であるが翻訳年代は漢訳より後代の11世紀としている（梶山雄一著「般若思想」『梶山雄一著作集』第二巻、春秋社、2012、p. 85）庄司史生先生はネパール系梵本（現観荘厳論の影響を受けたもの）と近似するテキスト群に『蔵08』『仏母』を入れている（庄司史生著「チベットに伝えられる三種の『八千頌般若』について」『印度学仏教学研究』第63巻第１号、2014、p. 457）ネパール系梵本自体も11世紀以降のものである（Aṣṭasāhasrikā : a collection of discourses on the metaphysics of the mahāyāna school of the buddhists / R. Mitra, 1888, p. xx-xxvi）　ここでは『仏母』『蔵08』ASPP の順に並べた

（４）佛名揵陀羅那の（所に）止まる。梵行を修すとはしていない

（５）佛名香積の所に在り。梵行を修すとはしていない

（６）雷音如来の所に在りて梵行を修す

（７）sgra dbyangs mi bzad par sgrog pa（声音を優れて発する（如来））の所で梵行を修す

（８）　大雷音佛の所に在りて菩薩道を行ずる

（９）　sgra dbyangs mi zad par sgrogs pa’i de bzhin gshegs pa（声音を優れて発する如来）の所で梵行を修す

(10)　大雲雷音佛の所に在りて梵行を修行す

(11)　雷音威王佛の所に在りて菩薩道を行ずる

(12)　往昔、雷吼音王如来のもとで梵行を修習せり

(13)　sgra dbyangs mi zad par sgrogs pa（声音を優れて発する（如来））の所で梵行を修す

(14)　Bhīṣmagarjitanirghoṣasvarasya tathāgata（雷吼音如来）の所で梵行を修す

(15)　天神が告げる

(16)　天神（人）に問う

(17)　天人が告げる

(18)　この時点で東へ行くように告げられていないが、S が D に対してこれまでのいきさつを述べる場面では、空中の声が「東へ行き般若波羅蜜を得よ」と告げたとしている

(19)　天人が説く

(20)　天人に対して答える

(21)　sangs rgyas kyi chos thams cad bsgrub par ’dod pa’i phyir ro（仏陀の一切法を修得せんと願うからである）とある

(22)　sangs rgyas kyi chos bsgrub par ’dod pa’i phyir ro（仏陀の教えを修得せんと願うからである）とある

(23)　sangs rgyas kyi chos thams cad bsgrub par ’dod pa’i phyir ro（仏陀の一切法を修得せんと願うからである）とある

(24)　ahaṃ hi･･･buddha-dharmān samudānetu-kāma（私は仏陀の諸の教えを得ることを欲するからである）とある

(25)　天人が告げる

(26)　「世尊を敬うが如く法師を敬うべし」とある

(27)　ston pa yin par ’du shes bskyed par bya’o（教師であると思うべきである）とある

(28)　「如仏の想を生ずべし」とある

(29)　ston pa’i ’du shes bskyed par bya’i（教師であると思うべきである）とある

(30)　ston pa yin par ’du shes bskyed par bya’o（教師であると思うべきである）とある

(31)　śāstṛ-saṃjñā tvayā tatrotpādayitavyā（教師であるとの念が汝によってその時に起こされるべきである）とある

(32)　五欲を五樂と表現している

(33)　魔が説法者に対して嫌悪を生ぜしむといえども違疑の相を起してはならないとしている

(34)　kula-putram avasādayati na samanvāharati（良家の子を責め、護念しない）が魔事としてあげられる

(35)　どこまで行けばよいのかわからず啼哭す（尋ねなかったこと後悔した訳ではない）

(36)　どこまで行けばよいのかわからず啼哭す（尋ねなかったこと後悔した訳ではない）

(37)　どこまで行けばよいのかわからず啼哭す（尋ねなかったこと後悔した訳ではない）

(38)　佛が飛来し諸天が佛を供養する様子が述べられる。佛がＳを称え、Ｓは佛に説法を請う。佛は説法してから行先を揵陀越と告げるが般若諸経のように詳しい様子は示されない

(39)　化佛が空中に立ちＳを称えＳは化佛に説法を請う。化佛は説法してから行先を揵陀越と告げその様子を示す

(40)　化佛が空中に立ちＳを称えＳは化佛に説法を請う。化佛は説法してから行先を香淨と告げその様子を示す

(41)　如来之像が現れＳを称えてから行先を香氏と告げ、そこの様子を示す

(42)　de bzhin gshegs pa’i gzugs（如来の姿）が現れＳを称えてから行先を spos ldan（香具）と告げ、そこの様子を示す

(43)　佛が空中に有りてＳを称えてから行先を衆香と告げ、そこの様子を示す

(44)　de bzhin gshegs pa’i sku（如来の姿）が現れＳを称えてから行先を spos dang ldan pa（香具）と告げ、そこの様子を示す

(45)　佛像が現じＳを称えてから行先を具妙香と告げ、そこの様子を示す

(46)　佛像が前に立ちＳを称えてから行先を衆香と告げ、そこの様子を示す

(47)　如来形像が現れＳを称えてから行先を衆香と告げ、そこの様子を示す

(48)　de bzhin gshegs pa’i gzugs（如来の姿）が現れＳを称えてから行先を spos dang ldan pa（香具）と告げ、そこの様子を示す

(49)　tathāgata-vigraha（如来の姿）が現れＳを称えてから行先を gandhavatī と告げ、そこの様子を示す

(50)「六百八十萬夫人采女有りて共に相娯樂す」とある

(51)「六百八十萬玉女妻有り」とある

(52)「六萬八千夫人婇女有りて圍繞し娯樂す」とある

(53)「現在定」を得る

(54)「見十方諸佛三昧」を得る。後に常啼菩薩が法上菩薩にこれまでの経緯を話す場面（対照表90）では「悉見十方諸佛三昧」を得たとしている

(55)「見十方佛定」を得る。対照表90では「悉見十方佛定」を得たとしている

(56)　11種の三昧を得る

(57)　55種の三昧を得る

(58)　51種の三昧を得る

(59)　51種の三昧を得る

(60)　55種の三昧を得る

(61)　51種の三昧を得る

(62)　60種の三昧を得る

(63)　62種の三昧を得る

(64)　62種の三昧を得る

(65)　三昧から覚め諸仏の去来を念じた後で「諸佛は我に教えて曇無竭菩薩の所へ至らしむ」とSが念じる

(66)　三昧から覚め諸仏の去来を念じた後で「佛は我に教えて法來の所へ至らしむ」とSが念じる

(67)　「諸衆生の為に廣く橋梁と作るべし」とある

(68)　「我れ聞くことを得已て説の如く修行し有情を成熟し佛土を嚴淨し速に無上正等菩提を證し」とある

(69)　「能く衆生の為に歸趣する所と作る」とある

(70)　「金色身、三十二大人相、八十種隨形好、常光、無量光、大慈、大悲、大喜、大捨、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を得る」とある

(71)　shes rab rnam par dag pa bsam gyis mi khyab pa dang / de bzhin gshegs pa'i stobs bcu dang / bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub ye shes kyang mngon par rdzogs par 'gyur（不可思議なる清浄な智慧と如来の十力と、阿耨多羅三藐三菩提という智慧も完全に成就するだろう）とある

(72)　「一切無礙智見を得る」とある

(73)　「無障智見、無上智見、一切智道相智一切相智を得る」とある

(74)　「佛の無上智慧、無上法寶を得る」とある

(75)　前項に「四無礙智」が含まれる

(76)　shes rab rnam par dag pa bsam gyis mi khyab pa dang / de bzhin gshegs pa'i stobs bcu rab tu thob par 'gyur（不可思議なる清浄な智慧と如来の十力を完全に獲得するだろう）とある

(77)　anuttaraṃ ca buddha-jñānam abhisambhotsyāmahe（そして無上なる仏陀の智慧を覚る）とある

(78)　「當に法輪を得べし、転じて、當に衆生を度脱すべし」とある

(79)　「法輪を得て転じ十方人を度すべし」とある

(80)　「當に無上之寶を得て一切貧を除くべし」とある

(81)　Dを供養し聞経するを欲している

(82)　sangs rgyas kyi chos bla na med pa dag bdag la stsol cig（仏陀の無上の教えを私に与えよ）と告げる

(83)　bla na med pa'i sangs rgyas kyi chos byin cig（無上なる仏陀の教えを与えよ）と告げる

(84)　無上正等菩提を与えよと告げる

(85)　sangs rgyas kyi chos bla na med pa dag bdag la stsol cig（仏陀の無上の教えを私に与えよ）と告げる

(86)　anuttarān me Śakra buddha-dharmān dehīti（シャクラよ、無上の仏陀の教えを私に与えて

ください）と告げる

(87)「女歸りて具に父母の爲に是の事を説く」とあるのみ

(88)「女具に之を陳ぶ」とあるのみ

(89) これまでのいきさつと財宝の提供を両親に願うが、常啼菩薩との同行について許可を求めるという表現はない

(90) これまでのいきさつと財宝の提供を両親に願うが、常啼菩薩との同行について許可を求めるという表現はない

(91) 父母は「我等云何が當に隨喜せざらん」と述べている。この随喜を他人の善き行いを讃歎することととれば、娘の行いを称賛したことを意味する。しかし、仏教の儀式に参加することととれば、娘と同行する意にもとれる。この言葉に応じて長者女は「我れ終に人の善法の因縁を断たず」としている。父母の意思が不明瞭である。ただし、この箇所以降父母が一切登場しないところから、ここでは娘の行いを称賛したものと判断した

(92)「譬えば比丘の第四禪を得たるが如し」とある

(93) dge slong bsam gtan dang po rtse gcig tu yid la byed pas snyoms par zhugs pa bzhin no（比丘が一点に集中する第一禅定を心に生ずることにより、瞑想に止まっているようである）とある

(94)「比丘の第三禪攝心愛隱に入るが如し」とある

(95) bsam gtan dang po la mnyam par bzhugs pa'i dge slong sems rtse gcig tu bzhag pa de lta bu'i thob par gyur to（第一の瞑想に住した比丘が一点に集中している、そのような楽しみを得たのである）とある

(96)「第三靜慮に入るを得たるが如し」とある

(97)「譬えば比丘の第三禪に入るが如し」とある

(98)「譬えば苾芻の第三禪樂を得るが如し」とある

(99) dper na dge slong bsam gtan dang po rtse gcig tu yid la byed pas snyoms par zhugs pa bzhin no（あたかも比丘が一点に集中する第一禅定を心に生ずることにより、瞑想に止まっているようである）とある

(100) tad-yathā 'pi nāma prathama-dhyāna-samāpannasya bhikṣor ekāgra-manasi-kārasya（あたかも第一の瞑想に到達した比丘が一つの対象に向けられた思惟をなすかのように）とある

(101) 下車してからは「共に西門從り入る」とあるのみで高台等については述べられない

(102)「七宝台」とある

(103) khang bu brtsegs pa（楼閣）とある

(104)「七宝台」とある

(105) khang brtsegs ma（楼閣）とある

(106)「七宝の大般若台」とある

(107)「七宝台」とある

(108)　「衆香城に入る」とあるのみ

(109)　khang pa brtsegs pa（楼閣）とある

(110)　sapta-ratna-mayaṃ kūṭāgāra（七宝からなる楼閣）とある

(111)　「四色の函」とある

(112)　rin po che sna bdun gyi khri bzhi（七宝の四座）とある

(113)　「七宝の大牀」とある

(114)　菩薩處を諸天が供養している様子のみが述べられ、高台や七宝の床については述べられていない

(115)　rin po che sna bdun las byas pa'i khri bzhi（七宝からなる四座）とある

(116)　S は出会った人に供養の理由を尋ねる

(117)　S は出会った人に供養の理由を尋ねる

(118)　出会った人が、高台の中に D がおり、D は般若波羅蜜のためにこの台を作ったことを告げる

(119)　出会った人が、高台の中に D がおり、D は般若波羅蜜のためにこの台を作ったことを告げる

(120)　「當に諸波羅蜜功徳を成じ諸佛法を具足し薩云若に逮ぶべし」とある

(121)　'di la bslabs pas byang chub sems dpa' sems dpa' chen po dag yon tan thams cad kyi pha rol tu phyin pa dang / sngas rgyas kyi chos thams cad dang / thams cad mkhyen pa nyid kyang myur du thob par 'gyur ba yin（これを学ぶと、諸菩薩摩訶薩は一切の功徳の完成と、仏陀の一切法と、一切（種）智もまた速やかに得るでしょう）とある。

梶芳光運先生は小品系大品系の一切種智を比較した上で、「放光と大品とは薩婆若となっているから一切智であって、梵本（二万五千頌般若）のみ一切種智であることになる。道行と小品とが一切智であるのは八千頌も同じであって、何処にも道種智、一切種智を説かないから疑問の余地はないが、大品系には疑義を挟み得る。大品系の他の箇所には、一切智と道種智及び一切種智が対比されているから、上掲対照中にある放光系の智は一切種智であって一切智（薩婆若）ではないであろう。三智の自覚に立つ放光系統としては梵本（二万五千頌般若）の如く一切種智とあるのが純粋ではないか。それが放光・大品共に薩婆若となって声聞の智たる一切智に見られるのは訳者の三智に対する認識の程度如何に係わることかもしれない」としている（梶芳光運著『大乗仏教の成立史的研究』、山喜房仏書林、1980、pp. 637-650）thams cad mkhen pa nyid は sarvajñatā（一切智）と対応する語であるが、上記の趣旨により『蔵18』と『蔵25』の一切智を一切（種）智とした

(122)　「一切諸功徳を成就し諸佛法一切種智を得」とある

(123)　gang la bslabs na / byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnams yon tan thams cad kyi pha rol du phyin pa dang / sangs rgyas kyi chos thams cad dang / thams cad mkhyen pa nyid thob par 'gyur ba'o（どこででも（それを）学ぶならば、菩薩摩訶薩たちは一切の功徳の完成と、仏陀の一切の教えと、一切（種）智を得るでしょう）とある

(124)　「速に一切功徳の彼岸に到り速に能く一切の佛法を成辦し速に能く一切智智を證得す」とある

(125)　「當に諸の功徳一切佛法を得盡し疾く薩婆若を得べし」とある

(126)　「一切智を成就し一切佛の功徳法を圓満す」とある

(127)　’di la bslabs pas byang chub sems dpa’ sems dpa’ chen po dag yon tan thams cad kyi pha rol tu phyin par rjes su ’gro ba dang ／ sangs rgyas kyi chos thams cad dang rnam pa thams cad mkhyen pa nyid kyang myur du thob par ’gyur ba yin（これを学ぶと、諸菩薩摩訶薩は一切の功徳の完成に随って仏陀の一切法と一切種智もまた速やかに得るでしょう）とある

(128)　sarva-buddha-dharmān sarvākārajñatāṃ ca kṣipram anuprāpnuvantīti（「一切の仏陀の教えと一切種智を速やかに得るでしょう」）とある

(129)　出会った人が般若波羅蜜が七宝の函の中にあることを告げる

(130)　出会った人が般若波羅蜜が七宝の函の中にあることを告げる

(131)　Dの如く諸の深法を得、般若波羅蜜を供養し演説し顕示し般若波羅蜜方便力を得、神通を成就し、菩薩事の中に於て自在を得ること、我もまた是の如くすべしとの誓願を起す

(132)　さらに未来世での自らの作仏も願っている

(133)　當來世で「如來應正等覺を成ず」「深法門に於て通達無礙たること」「能く上妙の七寶臺閣及び餘の供具を以て般若波羅蜜多を供養すること」「大衆の中に處し師子座に坐して般若波羅蜜多の甚深の義理を宣説し都て畏るる所無きこと」「般若波羅蜜多巧方便力を成就し速に能く所求の無上正等菩提を成辦す」「勝神通變化を得て自在に無量の有情を利益安樂す」とある

(134)　「般若波羅蜜を供養し恭敬し尊重し人の爲に演説し方便力を成就す」とある。さらに未来世での自らの作仏も願っている

(135)　さらに未来世での自らの作仏も願っている

(136)　さらに未来世での自らの作仏も願っている

(137)　さらに未来世での自らの作仏も願っている

(138)　梶山雄一著「般若思想」『梶山雄一著作集』第二巻、春秋社、2012、p. 209

(139)　拙論「常啼菩薩求法譚の成立時期について」『佛教大学大学院研究紀要文学研究科篇』第41号、佛教大学、2013、pp. 19-36

(140)　辛嶋静志著「初期大乗仏典は誰が作ったか―阿蘭若住比丘と村住比丘の対立―」『佛教大学総合研究所紀要別冊（仏教と自然）』、佛教大学総合研究所、2005、pp. 45-70　佐々木閑著「アランヤにおける比丘の生活」『印度学仏教学研究』第51巻第２号、2003、pp. 812-806 これに対して、経典に説かれた内容をほとんどそのまま制度的歴史に見立てようとする、歴史学的方法と思想的あるいは言語・文学的方法を混同する方法的不備を指摘する見解もある。下田正弘著「初期大乗経典のあらたな理解に向けて―大乗仏教起源再考―」『智慧世界ことば』（シリーズ大乗仏教４）、春秋社、2013、pp. 51-52

(141)　『道行』巻七「遠離品第十八」、大正８、p. 461a

(142)　『道行』はさらに「佛語須菩提。正使各各有阿羅漢。隨是行念。各各有辟支佛。隨是行念。各各有菩薩摩訶薩。城外行遠離。」と述べるが、辛嶋静志先生はこの部分が支婁迦讖の誤解に基

づく漢訳ではないかとしているA critical edition of Lokakṣema's translation of the Aṣṭa-sāhasrikā prajñāpāramitā（道行般若経校注）/ Seishi Karashima, Soka Univ., 2011、p. 370

(143) 『小品』巻七「恒伽提婆品第十八」大正８、p. 571a

(144) 『放光』巻十四「阿惟越致相品第 六十二」大正８、p. 96c97a

(145) この三解脱門は部派仏教においては事理的な面から修習されることが多かったが、般若経や十地経の影響によって、徐々に菩薩道の中心に位置づけられるようになったものである。宇野恵教著「三解脱門の衆生利益」『渡辺隆生教授還暦記念佛教思想文化史論叢』、永田文昌堂、1997、p. 300

(146) 『道行』巻七「守空品第十七」、大正８、p. 458c

(147) 修める、保持するの意

(148) thinks in his mind over the distinction (of the three kinds of concentrations) の意。A critical edition of Lokakṣema's translation of the Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā（道行般若経校注）/ Seishi Karashima, Soka Univ., 2011、p. 348

(149) 『道行』と同じ守空品に「當に是の因縁を棄てしむべし。空定、無想定、無願定を守し滅度門に向かいて中道に證を取らず」とある。『大明』巻四「守空品第十七」、大正８、p. 497c

(150) 直前に「菩薩は般若波羅蜜を行じ漚恕拘舎羅の爲に護らる。自ら其の地に於て中道に證を取り阿羅漢辟支佛地に墮ちず」とある。『道行』巻七「守空品第十七」、大正８、p. 458c

(151) 梶芳光運著『大乗仏教の成立史的研究』、春秋社、1980、p. 724

(152) 『六度』は原始よりのものに大乗的な精神を吹き込んだ本生経類と位置づけられる。干潟龍祥著『本生経類の思想史的研究』、東洋文庫、1978、pp. 80-83

（さえき　じかい　文学研究科仏教学専攻博士後期課程）
（指導教員：森山　清徹　教授）

2014年９月30日受理